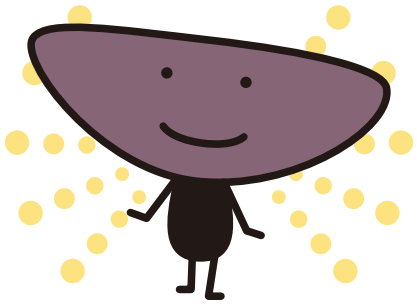
石庖丁がもたらした
立岩丘陵の繁栄

立岩遺跡

飯塚市教育委員会



いしぼっちょくん

立岩遺跡とは？

先史から近代まで、数多くの遺跡を有する飯塚市において、ひときわ重要な遺跡の一つが弥生時代の「立岩遺跡」です。遠賀川と穂波川の合流域東部にある立岩丘陵は市域の北部に位置し、立岩王墓が発見された立岩堀田遺跡、石庖丁の生産拠点である下ノ方遺跡・焼ノ正遺跡等といった弥生時代前期から中期の遺跡がまとまって所在しています。

「立岩遺跡」とは立岩丘陵上に所在するこれらの遺跡の総称であり、北部九州の弥生時代を知るうえで大変重要な遺跡として知られています。

立岩丘陵（南から北を眺める）

立岩堀田遺跡調査時（1963年）の写真

立岩遺跡の発掘調査から指定まで

1933（昭和8）年 **立岩運動場遺跡の調査**	市営グラウンド建設中に立岩丘陵上において弥生時代の遺跡が初めて発見されました。多数の弥生土器・石器とともに、甕棺墓が発見され、副葬品として貝輪などが出土しました。
1934（昭和9）年 **下ノ方遺跡の調査**	採土工事中に発見され、石庖丁とその各製作工程を示す未製品が多量に出土しました。また、青銅器（銅剣または銅矛）の鋳型が採集されました。
1934・1935（昭和9・10）年 **焼ノ正遺跡の調査**	県立嘉穂高等女学校（現在の県立嘉穂東高校）敷地整地工事中に発見され、多量の弥生土器・石器とともに、銅戈の鋳型片が採集されました。
1963・1965（昭和38・40）年 **立岩堀田遺跡の調査**	採土工事中に甕棺墓が発見されたことから、3次にわたる発掘調査が実施されました。弥生時代中期後半を中心とした甕棺墓約40基などが確認され、立岩遺跡の頂点に立つ最有力層の集団墓地が発見されました。
1977（昭和52）年	立岩堀田遺跡出土の甕棺関係の遺物が、国の重要文化財に指定されました。

主要な遺跡

① 立岩運動場遺跡

甕棺墓５基が発見され、3・4号甕棺からは女性の人骨とイモガイ製貝輪が出土し、5号甕棺からは成人男性の人骨とゴホウラ製貝輪と鉄剣が出土しています。出土状況から、被葬者の性別により貝輪として用いる貝の種類に違いがあることが明らかとなりました。

② 立岩堀田遺跡（市指定史跡）

甕棺墓約40基などが発見されました。甕棺墓群は、前漢鏡や銅矛、貝輪、ガラス製玉類などの豪華な副葬品を有しており、弥生時代中期後半の嘉穂地域において最有力集団の墓地であったことが明らかとなりました。遺跡からの出土品は一括して国の重要文化財に指定されています。

③ 焼ノ正遺跡

弥生時代前期～中期の弥生土器などが多量に出土し、甕棺墓も確認されました。また、銅戈の鋳型片が採集され、1987（昭和62）年には飯塚市の有形文化財に指定されました。また、1979（昭和54）年の発掘調査では、住居跡などの遺構や、土器・石器・鉄ノミなどが発見されました。特に、石庖丁と石戈の未製品が多く、石器製作の中心地であったことが推測されます。

中細銅戈鋳型

④ 下ノ方遺跡

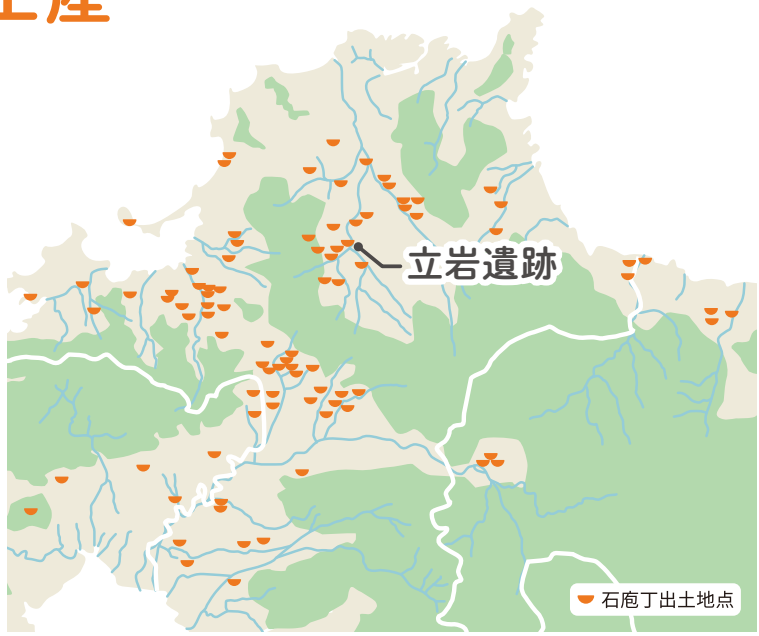
発掘調査で、弥生土器や石庖丁などの石器が発見されました。中でも、石庖丁の未成品やその製作過程でできた石片が多く発見されたため、焼ノ正遺跡と同様に石庖丁製作の中心地であったことが推測されます。また、遠賀川流域では初めての石製把頭飾（はとうしょく）や青銅器の鋳型片が発見されました。

下ノ方遺跡出土の石庖丁

立岩遺跡の石庖丁生産

立岩遺跡の石庖丁製作は弥生前期末に始まり、中期後半に最盛期を迎えます。その背景には、人口増加や稲作の普及により、収穫に使う石庖丁の需要が一気に高まったことや、有力首長の管理下において大量生産を可能とする専業体制を確立できたためと推測されます。また、近隣の笠置山（かさぎやま）周辺に良質な石材の産地があり、遠賀川を使った輸送にも便利な場所であったため、恵まれた地理的条件も理由の1つと考えられます。

こうして、恵まれた立地と組織力を背景に誕生した『立岩ブランド』の石庖丁は、福岡・佐賀・朝倉地域を中心に北部九州各地へと広まりました。

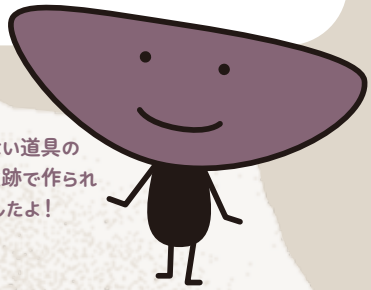


立岩産石庖丁のひろがり

立岩産石庖丁の石材

石材は、立岩遺跡から北西に約5km離れた笠置山の山麓から採集されました。独特の淡い小豆色（中には淡い緑色もある）が特徴的な輝緑凝灰岩（きりょくぎょうかいがん）を用いて製作されました。

笠置山麓（千石峡）



収穫に欠かせない道具の
ぼくたちは立岩遺跡で作られ
各地で活躍したよ！

石庖丁の製作過程

石庖丁とは、主に弥生時代に、
稲の収穫に使用された道具です

① 原石を叩いて板状にし、おおまかな形を作る

② 更に細かく叩いて半月型に近づける

③ 粗い砥石で全体を磨く

④ 穴を細かくたたいて円錐状のくぼみをつくり、その部分に石の錐をあて、両側から穴をあける

⑤ 穂を刈る刃の部分を細かい砥石で磨いて完成！

立岩遺跡の王墓の出現

立岩堀田遺跡からは、約40基もの甕棺墓が発見されています。その中でも、昭和38年に行われた発掘調査では、前漢鏡6面などが副葬された10号甕棺が発見され、その副葬品の豊富さから弥生時代中期後半期に嘉穂地域一帯を治めていた王墓と考えられます。

他にも、立岩堀田遺跡からは、豊富な副葬品をもつ甕棺が多く確認され、立岩丘陵の集団の頂点に立つ集団墓地の発見となりました。

立岩堀田遺跡出土の前漢鏡

10号甕棺

連弧文「日有喜」銘鏡
（1号鏡）径15.6㎝

重圏「精白」銘鏡
（2号鏡）径17.8㎝

重圏「清白」銘鏡
（3号鏡）径15.4㎝

連弧文「日有喜」銘鏡
（4号鏡）径18.2㎝

連弧文「清白」銘鏡
（5号鏡）径18.0㎝

重圏「姚皎」銘鏡
（6号鏡）径15.9㎝

日有喜

この世の無事息災
不老長寿を祈る
いわゆる吉祥の言葉が
記されています

10号甕棺出土の連弧文「日有喜」銘鏡（1号鏡）径15.6㎝

35号甕棺

連弧文「清白」銘鏡
（8号鏡）径18.05㎝

28号甕棺

重圏「昭明」銘鏡
（7号鏡）径9.8㎝

34号甕棺

連弧文「日光」銘鏡
（9号鏡）径4.9㎝

39号甕棺

連弧文「久不相見」銘鏡
（10号鏡）径7.2㎝

※銅鏡の写真は
ほぼ同じ縮尺です

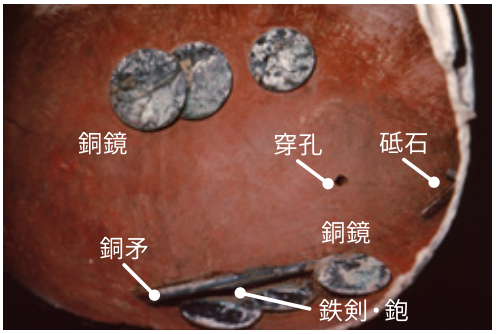
立岩堀田遺跡の主な甕棺墓

10号甕棺

石蓋単棺の成人用甕棺墓です。他の甕棺と比べ、副葬品が極めて豊富であり、被葬者が明らかに高い身分にあったことがうかがえます。6面もの前漢鏡、銅矛1本、鉄剣1本、鉇（やりがんな）1個、砥石2個が副葬品として出土しました。

出土した鏡の数は、奴国（なこく）の須玖岡本（すぐおかもと）遺跡や伊都国（いと）の三雲南小路（みくもみなみしょうじ）1号甕棺につぐもので、弥生時代中期後半頃、この地域を治めていた立岩王の墓と考えられます。

10号甕棺出土状況

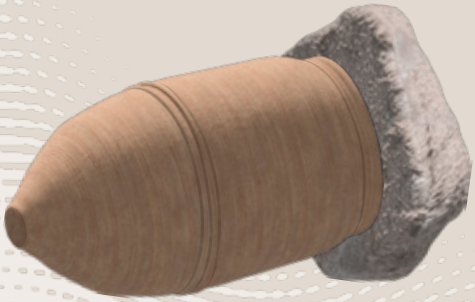


10号甕棺内

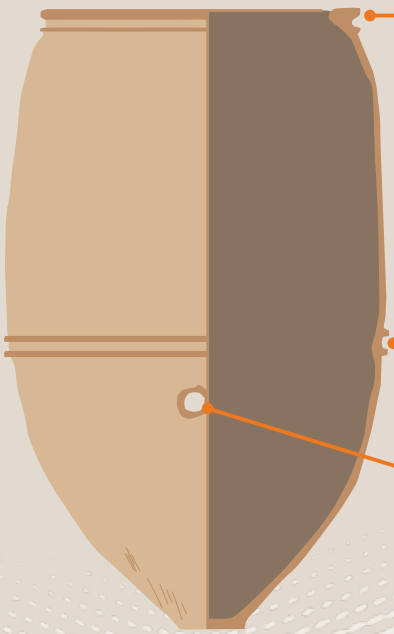
10号甕棺出土銅矛

立岩遺跡の甕棺の特徴

甕棺墓とは弥生時代の北部九州を中心に普及した甕や壺を棺として用いる埋葬方法です。その形の特徴から、時期などを知ることができます。立岩堀田遺跡で確認された甕棺の多くは「立岩型」と呼ばれる弥生時代中期後半の甕棺で、立岩丘陵周辺の 限られた範囲でしか確認されていません。また、埋葬の方法も特殊で、板状の大型の石を甕の代わりに使用した、「石蓋単棺」が発達することも特徴の一つです。この埋葬方法は、他地域でも確認されていますが、立岩堀田遺跡と同様に中期後半段階に限定されます。



石蓋甕棺墓イメージ



甕棺イメージ

特徴1
器高が高く、130cm前後もあり、中には140cmを超える大型品も！

特徴2
分厚い逆L字の口縁部

特徴3
長く「ずん胴」な胴部

特徴4
断面がコ字型の凸帯

特徴5 穿孔がある

特徴6
器壁は全体的に厚く、重厚な作りをしているタタキ成形の痕がある

28号甕棺

石蓋単棺の成人用甕棺墓です。注目されるのは、棺内から副葬品として、ガラス製の管玉553個・丸玉1個・棗玉1個、塞杆状ガラス器5個、前漢鏡1面（7号鏡）、素環頭刀子1本が出土しました。

装身具（アクセサリー）の出土

出土したガラス製品は、出土状況から、髪飾りであったことが判明しました。また、塞杆状ガラス器は、女性のアクセサリーとして使用されるもので、髪にさした笄の飾りであったと考えられています。

副葬品の組合わせから、この人物は、女性である可能性が高く、巫女もしくは王妃のような存在であったと推測されます。

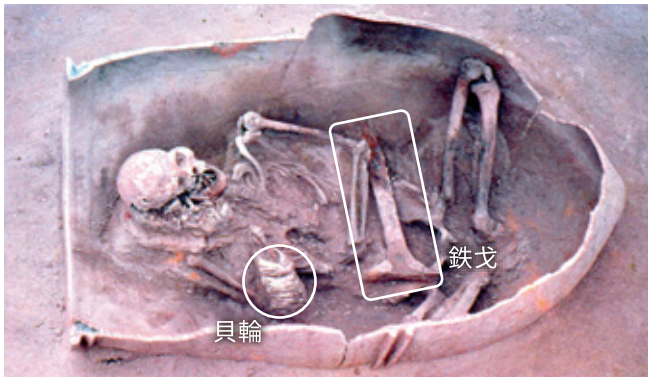
髪飾りをした女性復元像

頭飾り出土状況

34号甕棺

石蓋単棺の成人用甕棺墓です。人骨の保存状況が最も良好な状態で残っていました。被葬者は、当時としては高身長である約166cmの30歳くらいの成人男性であったことがわかりました。前漢鏡1面、鉄戈1本、ゴホウラ製貝輪14個が出土しました。

貝輪は右腕にはめており、鉄戈は下腹部に横たえている状況が確認されています。



34号甕棺出土状況

ゴホウラ製貝輪とイモガイ製貝輪

34号甕棺の人物が身に着けていた14個の貝輪は、沖縄本島など南西諸島でしか採取できないゴホウラ貝を原材料としています。このことから、弥生時代の九州と南西諸島との間に交易があったことが判明しました。

また、立岩運動場遺跡から出土したイモガイ製貝輪も、南西諸島に生息する巻貝で作られたもので、北部九州の弥生時代の遺跡から出土しています。これらはいずれも高い身分の人々が身に着けていた装身具で、その出土例からゴホウラ製貝輪は男性用、イモガイ製貝輪は女性用であったことが明らかとなっています。

34号甕棺出土のゴホウラ貝製腕輪

立岩運動場遺跡出土のイモガイ貝製腕輪

さいごに

1933（昭和8）年、立岩丘陵で、偶然甕棺が発見され、遺跡の存在が確認されました。さらに1963（昭和38）年には、立岩堀田遺跡も工事中に偶然発見されています。こうした偶然の重なりによって調査が行われ、石庖丁の一大生産地であったことや、嘉穂地域を治めた王の存在が想定され、弥生時代を知るうえで重要な事実が明らかになりました。その価値から、出土遺物は国の重要文化財に指定されています。多くの遺跡が開発によって失われるなか、立岩遺跡は偶然と人々の尽力によって守り伝えられてきた、地域のかけがえのない宝です。本冊子が、文化財を知り、未来へ伝えるきっかけとなれば幸いです。

10号甕棺出土の連弧文「日有喜」銘鏡（1号鏡）

編集・発行

飯塚市歴史資料館（飯塚市教育委員会文化課 文化財保護推進室）

〒820-0011　福岡県飯塚市柏の森959番地の1

TEL／FAX 0948-25-2930　ホームページ https://www.city.iizuka.lg.jp/site/rekishi

発行日　令和8（2026）年3月